6 文章 『宋名臣言行録』〈呂蒙正〉

▼本誌 P.14〜15

要旨 ある役人が呂蒙正の知遇を得るため、二百里先を映すことができる古い鏡を献上しようとした。しかし、呂蒙正は小皿程度の顔を映すのに、そんな鏡は必要ないと取り合わなかった。この言動を、人々は賢明だと評価した。

否定形を確認しよう①

◎部分否定

4★ 不二復一〜一(セ)	決して〜ない・二度とは〜ない

※「不復〜」には、強い否定と部分否定の意味がある。

不二必一〜一(セ)	かならズシモ〜(セ)ず 必ずしも〜とは限らない
不二常一(ニハ)〜一(セ)	つねニハ〜(セ)ず いつも〜とは限らない

◎全部否定

必ズ 不二〜一(セ)	かならズ〜(セ)ず 必ず〜しない
常ニ 不二〜一(セ)	つねニ〜(セ)ず いつも〜しない

※全部否定と部分否定は、否定語と副詞の語順によって区別する。

・「否定語＋副詞＋動詞」…部分否定

・「副詞＋否定語＋動詞」…全部否定

◎二重否定

莫レ 不ルカ(ハ)一(セ)〜	〜(セ)ざル(ハ)なシ 〜しないものはない
非ズ 不ルニ一(セ)〜	〜(セ)ざルニあらズ 〜しないわけではない
未ダ 嘗テ 不ニ一(セ)〜	いまダかつテ〜(セ)ずンバアラず これまでに〜しなかったことはない

※否定語を二つ重ねた形。「〜ないものはない」という強い肯定の意を示す。

本文

主題―述語を確認しよう 太字はこの回で学習する句形・漢字。

有二一朝士一。（主語）家二蔵一古鑑一。（一朝士は）自ら言ふ、「能く照二百里一。」（一朝士は）

★欲下因二公弟一献上以求知上。（一朝士は）

★★公笑ひ曰はく、「吾が面は不レ過二楪子大一。安くんぞ用レ照二百里一。」（呂蒙正の）（百が面に）

言フ之。（一朝士の古鑑のことを）

二百里一。」其レ弟遂ニ不ニ復一言フ。（呂蒙正の）

★★聞者、欺服し、以謂へらく（主語）

5賢二於李衛公一遠シ矣。

★蓋シ寡好而不ニ為レ物ノ累ヒ。

主語者、昔賢之の所レ難シ也。

重要漢字

数字は行数番号

1★能(よク)…〜できる　2★欲(ほっス)…〜しようとする

2★因(よル)…頼る　4★遂(つひニ)…その結果

4★以謂(おもへラク)…思うことには　5★蓋(けだシ)…思うに

解答のための着眼点

問一 (語句)

□頻出漢字の読みを確認する。

ⓐ「遂」には、「つひニ」「とグ」の読みがある。ここでは下の「復た言はず」にかかるので、副詞「つひニ」の読み。ⓒ「蓋」には、「なんゾ〜ざル」「おほフ」「けだシ」の読みがある。「蓋」以下の文は筆者の評になっており、「思うに」の意で解釈できるので、「けだシ」と読む。

問二 (語句)

□複合語「以謂」の読みを確認する。

「以謂」は「おもへラク」と読み、「思うに・思うことには」の意。「以為」も同じ意味。読みも意味も重要。

問三―1 (訓読)

□一二点をはさんで返ることに注意する。

訓点を付ける問題では、一二点をはさんで返る上(中)下点、レ点、点、熟語に返る訓点の付け方に注意したい。傍線部は「弟」→「因」に返るところで一二点を使う。そして、「知」→「求」→「欲」の順に返るので、点と下点を使う。

2 (内容) ➡1 参照

□傍線部後半の「求知」の意味を文脈からおさえる。

「呂蒙正の弟をたよって古鑑を献上して知を求める」という文意。ある役人が宰相である呂蒙正に、その弟を介して家宝の鏡を献上しようとしている状況から考えて、ここは鏡を献上することによって、呂蒙正に自分の存在を「知」ってもらおうとしているとわかる。

問四 (解釈)

□反語形に注意する。

□「照二百里」を本文に即してわかりやすく解釈する。

反語形「安〜」は「どうして〜か、いや〜ない」と訳す。

書き下し文・現代語訳

一朝士有り。家に古鑑を蔵す。自ら言ふ、「能く二百里を照らす。」と。公の弟に献じて以て知を求めんと欲す。其の弟間を伺ひて従容として之を言ふ。公笑ひて曰はく、「吾が面は楪子の大に過ぎず。安くんぞ二百里を照らすを用ひん。」と。遂に復た言はず。

ある役人がいた。家に古い鏡を所蔵していた。(役人は)自分から言った、「(この鏡は)二百里先を映すことができる。」と。(役人は)公(呂蒙正)の弟を通じて献上して、それによって(呂蒙正に自分のことを)知ってもらおうとした。呂蒙正の弟は折を見て気軽に役人の鏡のことを話した。公が笑って言うことには、「私の顔は小皿ほどの大きさに過ぎない。どうして二百里先を照らす鏡を用いようか、いや用いない。」と。

其の弟聞く者欺服し、以謂へらく、蓋し寡好にして物の為に累はされざる者は、昔賢の難しとする所なり。

呂蒙正の弟は、その結果二度とは(人を取り持つようなことを)言わなかった。(この話を)聞いた者は感服し、思うことには、「(呂蒙正は、あの名賢将の)李衛公よりも賢なること遠しと。李衛公よりもすぐれていることはるか遠くだ(李衛公よりもはるかにすぐれている)。」と。思うに、物欲が少なくて、物に わずらわされない者は、昔の賢人もなかなかできなかったことである。

出典解説・本文解説

「宋名臣言行録」朱熹

南宋の儒学者、朱熹の編。北宋の時代の名臣の言行を記録した書。

本文は、名臣と名高い呂蒙正のエピソード。ある役人が呂蒙正に賄賂を贈ろうとしたが、呂蒙正はたくみな方便で断った。呂蒙正の対応は、賢明であり、物にわずらわされなかったと賞賛された。

解答と採点基準

問一 ⓐつひに(ついに) ⓒけだし **問二** (イ)

問三 1欲下因二公弟一献上以求知上。 2(ウ) (十八字)

問四 どうして二百里先を照らす鏡を用いようか、いや用いない。 4点

［反語の訳が4点。］

問五 復た言はず。 **問六** (エ)

問七 一朝士からの贈り物を受け取らなかった

［「一朝士の古鑑(賄賂)を拒否した」ことが書かれていれば可。］

内容を確認しよう

Ⅰ古鑑 Ⅱ楪子 Ⅲ李衛公

知識を確認しよう(3)読みがなは不要。)

1Ⅰよ Ⅱほつ(ほっ) Ⅲよ

2あたは(あたわ)

3(1)賢とする所必ずしも賢ならざるなり。

(2)之が為に惨まざる者莫し。

(3)国未だ得て栄えずんばあらざるなり。

4(1)いつも油を手に入れるとは限らない。

(2)いつも喜ばない。

1行目の一朝士の発言「能照二百里」を参考に、「照二百里」を「二百里先を照らす鏡」と解釈する。以上をふまえて現代語訳する。

問五 (訓読)

□部分否定「不復〜」の文であることをおさえる。

否定語＋副詞＋動詞という語順になっていることに注意。「不復〜」は部分否定の文で、「復た〜ず」と読んで、「二度とは〜ない」と訳す。

問六 (解釈)

□比較の用法をおさえたうえで、「賢於李衛公」と「遠」の「主語―述語」の構造をとらえる。

比較形「A〜於B」は、「AはBよりも〜だ」の意。比較形「賢於李衛公」の部分の主語は「呂蒙正」であるが、傍線部全体は「賢於李衛公」が主語、「遠」がその述語という構造になっている。文の構造をおさえて現代語訳すると、「呂蒙正が李衛公よりもすぐれていることは、はるか遠くだ」となる。「呂蒙正が李衛公よりもすぐれている」という文意をおさえる。

問七 ●(読解) ➡2 参照

□筆者が評価している呂蒙正の言動を読み取る。

筆者は、「物欲が少なくて物にわずらわされない」と呂蒙正を評している。古鑑を献上して知遇を得ようとした一朝士に対して、呂蒙正は、「私の顔は小皿程度の大きさなので、それほど映る鏡は必要ない」と断る。筆者は、呂蒙正は、物欲にとらわれることなく賄賂を断ったことを評価しているのである。

知識を確認しよう(書き下し文・現代語訳)

1 大風あり、幾ど渡ること能はず。

(強風が吹いて、すんでのところで(川を)渡ることができないところであった。)

4(1)家貧にして常には油を得ず。

(家が貧しくていつも油を手に入れるとは限らない。)

(2)簡子朝を聴く毎に、常に悦ばず。(簡子は政務について(の意見を)聴くたびに、いつも喜ばない。)